
海洋底の気泡

富士堂あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海洋底の気泡

【Nコード】

N5262Z

【作者名】

富士堂あかり

【あらすじ】

恋は人を盲目にさせるといいうが恋が終わった後二人はどうなってしまうのだろうか。二人の将来に不安を持つ男と心が不安定な女の子のお話

ああ、と義久は開口一番にそう言った。それ自体はなんの意味ももたない普通の言葉である。しかしそれは彼女を酷く苛立たせた。

二人が一緒に住み始めてから1年が過ぎた。結婚はまだしてない。いや、このまま二人が続くかどうかも傍から見ても疑問だった。

義久は彼女、美央がいつものそれだと瞬時に分かった。だからこのあの言葉だったのだがそれを当たり前のように受け流されることが彼女には許しがたいことだった。

女の苛立ちは部屋の空気を変え、義久は酷く居心地が悪く感じた。しかし自分にはどうすることも出来ないのだ。

付き合いおうと言い出したのは義久の方だった。在学中からずっと好きだった、大学を卒業するとき、このまま言わないで後悔し続けるより、そう思っただけで意中を告げた彼にとって美央が恥ずかしそうに笑って自分の手を握り返してくれたことは今でも強く思い出に残っている。

それから二年ほど付き合い合っただけ、お互い仕事にも前ほど苦痛だと思わなくなっただけ、一つのアパートを借りて同居が始まった。しかし問題が発生した。美央は酷く癪癪持ちというか、少し情緒不安定だった。今までは外でしか、一時的にしか会わなかった義久にとって理由も分からないまま泣き叫んだり死んだように横になってるのを見るのは予想だにできなかったことだ。

美央は理由なく泣くことが多かった。いや、理由がないはずはないのだが義久には理解しがたいことばかりだった。女特有のそれなのか、知人に一度相談したことがあるが何処もそんなもんだと軽くあしらわれた。しかし彼には美央が正気の沙汰だとは思えなかった。

ある時、義久は泣き叫ぶ美央に怒鳴り散らした。彼女は放心したようにこちらを見ていた。お前のせいなのに、どうして俺が怒ってるのか分からないっていうのか、お前はいつまでも泣いてるし、理由を聞いても何も言わない、俺にどうして欲しいって言うんだ、お前はどうしたいんだ。

義久は沸きあがった頭を静めて病院にいかう、そういつてひそかに調べていた精神科に美央と二人で行った。診察室、彼女の気持ちを分かってやりたい、そう思っていた義久は診察中ずっと廊下の長いすに腰掛けていた。怒りが湧いた、お前はどうして俺に何も言ってくれないんだ、と。

愛してるからこそ、大事に思っているからこそそんな不安定な美央に付き添い、泣き止むまで背中をたたいてやつたりもした、付き合ってから長いが彼女が喜ぶであろう場所につれてつたり、どうして彼女はいつも俺を睨むように泣くのだろうか。彼女は何が気に食わないんだろうか。

自分の美央に対する愛が分からなくなってきた。いままでずっとあったはずのそれは酷くもやもやしてそれは彼女の気持ちを裏写しにしたものなのかと漠然と恐怖した。

もうだめなのかもしれない。このまま一緒に居ても何も解決しないのかも、彼女はいつまでもヒステリックな声を上げ、空っぽの器のように、それなのに俺を恨んで生きていくのか、と。

「美央、俺達、どうしようか・・・」

美央は答えない。生気の抜けたガラスのような目がぼんやりと義久を映している。

「大事な話なんだ、このままだと俺達は幸せにはなれない・・・一緒に暮らしていくことは出来ない」

美央が俺から離れたいと思っているのなら、他に好きな人がいるのなら別れようと言う事、家は自分が新しいところを探したっていいということ、二人でやっていきたいと美央が望むなら一緒に頑張ろうということ、義久が考えて実現可能だと思ったことは全て話した。しかし、美央は依然黙ったままだ。死んでるほうがましだった。

「美央・・・！」

義久にはどうしたらよいか分からなかった。その時彼女を抱きしめたのは無心の策だったのか、彼女と別れたくないとう本心からなのかは分からない。泣けてきた。彼女が分からない、ただ向かい合って全て話し合いたただけなのに、気が付けば泣いていた。声を抑えることが出来なかった。美央もすすり泣いてることに気づくのになう時間は掛からなかった。胸の中で、お互いの頭を預けるようにして二人は年も忘れ泣いていた。

「・・・あのね、義久君」

「う、うんっ・・・」

「私・・・あなたのことが分からないの、だって、つわたい・・・義久君に、何もしてあげてないもの・・・義久君みたいに、つく、なんでも出来ないの・・・」

「美央・・・」

「全部、私の考えてること筒抜けだったから・・・私のして欲しい

こと、全部してくれたから・・・でも、私は義久君のして欲しいこと、分らないの・・・どうしたらいいか、わからなくて・・・」

美央の弱弱い声が耳元に重なる。ああ、と義久は脱力した。どうしてそう、女つてのは。

「美央は馬鹿だっ・・・つく、俺が、何も貰ってないとしても・・・？俺が、お前のこと、なんでも分かってるって・・・？」

「・・・つく、ううう・・・」

「好きじゃなかったらこんなこと、しねーよ・・・」

「でもっ」

「・・・一緒にいたいからこうしてるんだろ・・・」

目が覚めると美央と二人、ベッドの中にいた。そういえば随分と長い間別々に寝ていた気がする。ソファで寝る美央の姿が瞼に浮かび毛布をかけなおしてやったことを思い出し笑った。美央は疲れてまだ夢の中のようなだ。朝飯は自分が作るうかと思いかけていや、と。折角の二人の家なのだ、たまには一緒に作るのもいいかもしれない、そう思っただけで眠る彼女の幼い顔を見ながら何を食べようか、なんて考えてた義久であった。

（後書き）

色物じゃない作品はこれが初めてなのですが普通のお話って難しいですね。なかなか難産でしたがいかがでしたでしょうか。

あまり明るい話ではないのですがこういうのもありなのかな、と。男性にリアリティを持たせるのはやっぱりむずい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5262z/>

海洋底の気泡

2011年12月17日21時49分発行